

おてら

常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会

写経会

毎月第二・四火曜日
午後一時より

お彼岸中にお墓参りをしましょう
ご本尊様にもお参りいたしましょう

九月二十日～二十六日

二十三日(金・祝)

彼岸中日法要

午前十一時より

おときは中止致します

二十四日(土)

永代経法要

午後七時より

先祖への供養は私への供養

逆縁と長寿

位職

蒲原 霊英

七月八日安倍元首相が暗殺されたニュースを知ったのは、熱中症で亡くなられた方の葬儀を終えた後でした。この二つの死は、共に朝は元氣だった方の急死であり、共に母を遺しての逆縁でした。そして、この二週間後、娘が轢き逃げに遭いました。轢いた車は信号無視でかなりスピードを出してしまいましたが、おかげさまで幸い軽傷で済みました。もしあのまま娘が死んでしまっていたらと思つた時、ある有名な仏教説話を思い出しました。

キサー・ゴータミーという母親が、ようやくよちよち歩きができるようになったばかりの一人息子を失い、悲しみに打ちひしがれていました。彼女は、息子を治し生き返らせる薬を求めて、お釈迦様の下を訪ねました。お釈迦様は、一人も死人が出たことのない家からケシの実をもらって来るように言いました。インドでは常備薬のケシの実は何の家にもありました。どの家も「父が母が」「夫が妻が」「子どもが孫が」と…。ゴータミーは、結局一粒も得ることなくお釈迦様の下に戻りました。考えてみれば当然のこと。誰だつて親が居て祖父母も曾祖父父母も居る。家族を亡くしたことがない人など、この世に居るはずがないのです。また、医療も発達していないので、亡くなる子供も大勢居たことでしょう。死が生きる者の逃れられない定めであること、を教えられたゴータミーは、息子の葬儀を勤め、直ちにお釈迦様の弟子になりました。そして、お釈迦様は彼女に、「不死の境地を見ることがなしに百年間も生きるより たとえ刹那の生であれ 不死の境地を見られれば これより勝ることはない」と詩を贈りました。いつ終わっても不思議ではないのちを、今生かされているということに感謝し、どう生きるのかを考えなさいという教えです。たとえ短命であっても、生かされていることに感謝し、喜びを持って楽しく懸命に日々を重ねてゆけば、とても豊かな一生を送らせていただくことができますが、それを考えることすらせずに唯々長生きしてみても虚しいだけなのです。その感謝の言葉が、南無阿弥陀仏のお念仏です。寿命と言いますが、「命」は量的ないのち、つまりどれだけ生きたかということです。それに対して、「寿」は質的ないのちのことなので、どのように生きたのかを問われます。ですから、長くなつたのちを寿いで生かさせていだいて、初めて長寿と言えます。唯の長生きなのか、それともありがたい長寿なのかは、自分の生き方次第です。

合掌

ロシア軍のウクライナ侵攻を非難し戦争の早期終結を願う決議

二〇二二年二月二四日、ロシア軍はウクライナに侵攻した。いかなる理由があれ、武力で他国の主権を蹂躪するこの蛮行を強く非難する。また、これに協力したベラルーシも、同様に強く非難されるべきである。

さらにプーチン大統領は、核兵器の使用も示唆した。許しがたい言動である。爆撃を逃れ、地下に避難した子どもたちの声を我々は聞いた。「死にたくない。戦争が早く終わって欲しい」と。

一方で、この武力行使を非難し、戦争に反対する声が全世界に広がっている。ロシアでも、強権的な弾圧にもかかわらず、多くの人々が勇気ある声をあげている。我々は、これら勇気ある人々に心から連帯をする。

我々は、被爆国の市民として、生命を慈しむ仏教徒として、世の安穏を願う念仏者として、この武力侵攻を非難し、自己正当化をくりかえす権力者の愚かさを批判し、歴史をかえりみつつ、この戦争の一刻も早い終結を願う。

仏暦 二五六五(二〇二二)年 三月四日

浄土真宗本願寺派 宗議会

ロシア連邦によるウクライナ侵攻に対する声明

二〇二二年二月二四日、ロシア連邦がウクライナへの軍事侵攻に踏み切りました。ウクライナの各都市では子どもを含めた多くの民間人が犠牲となり、加えて百万人を超える国民が難民として避難を余儀なくされていると報道されています。

私たち浄土真宗本願寺派は、いかなる理由があろうとも、人命を軽視し、武力で一方的に現状を変更しようとする暴力的な行為に抗議し強く反対の意を表します。このたびのウクライナへの侵攻だけでなく、世界各地でテロや武力紛争が続いて

いる現実があります。あらためて、あらゆる場での暴力の行使を非難するとともに、一刻も早く対話による平和的な解決がなされ、ウクライナに再び平和が訪れますよう願うものです。

思想文化や制度による厳しい対立や相互の排除をのり越えて、自他共に心豊かに生きていけるよう、共に努力する先にこそ、恒久的な平和を実現する道が切り拓かれてくるものと確信いたします。

二〇二二(令和四)年 三月八日

浄土真宗本願寺派総長 石上 智康



新盆法要



八月六日夜七時から、護持会主催の新盆法要が営まれました。今年も、新型コロナウイルス感染症防止の為、参拝者を一家族三名までに限定して執り行われました。

読経中にご法名が読み上げられると、参拝者が順次焼香。住職によるお盆の由来等の法話の後、記念品とお供物の下付がありました。尚、婦人部の方々の白玉の振る舞いは、今年も残念ながら中止となりました。コロナが猛威を振るう中ではありましたが、各々境遇は違えども、共に大切な方を亡くされて初めてのお盆を迎える皆様で、一緒にご供養ができたことは有り難いことでした。今此処に在るいのちに感謝です。

